開化の殺人

芥川龍之介

　下（しも）に掲げるのは、最近予（よ）が本多子爵（ほんだししやく）（仮名）から借覧する事を得た、故ドクトル・北畠義一郎（きたばたけぎいちらう）（仮名）の遺書である。北畠ドクトルは、よし実名を明（あきらか）にした所で、もう今は知つてゐる人もあるまい。予自身も、本多子爵に親炙（しんしや）して、明治初期の逸事瑣談（いつじさだん）を聞かせて貰ふやうになつてから、初めてこのドクトルの名を耳にする機会を得た。彼の人物性行は、下の遺書によつても幾分の説明を得るに相違ないが、猶（なほ）二三、予が仄聞（そくぶん）した事実をつけ加へて置けば、ドクトルは当時内科の専門医として有名だつたと共に、演劇改良に関しても或急進的意見を持つてゐた、一種の劇通だつたと

云ふ。現に後者に関しては、ドクトル自身の手になつた戯曲さへあつて、それはヴオルテエルの Candide の一部を、徳川時代の出来事として脚色した、二幕物の喜劇だつたさうである。

北庭筑波（きたにはつくば）が撮影した写真を見ると、北畠ドクトルは英吉利（イギリス）風の頬髯を蓄へた、容貌魁偉（くわいゐ）な紳士である。本多子爵によれば、体格も西洋人を凌（しの）ぐばかりで、少年時代から何をするのでも、精力抜群を以て知られてゐたと云ふ。さう云へば遺書の文字さへ、鄭板橋（ていはんけう）風の奔放な字で、その淋漓（りんり）たる墨痕（ぼくこん）の中にも、彼の風貌が看取（かんしゅ）されない事もない。

勿論予はこの遺書を公（おほやけ）にするに当つて、幾多の改竄（かいざん）を施した。譬（たと）へば当時まだ授爵の制がなかつたにも関らず、後年の称に従つて本多子爵及夫人等の名を用ひた如きものである。唯、その文章の調子に至つては、殆（ほとんど）原文の調子をそつくりその儘（まま）、ひき写したと云つても差支へない。

本多子爵閣下、並に夫人、

予は予が最期（さいご）に際し、既往三年来、常に予が胸底に蟠（わだかま）れる、呪ふ可き秘密を告白し、以て卿等（けいら）の前に予が醜悪なる心事を暴露せんとす。卿等にして若しこの

遺書を読むの後、猶卿等の故人たる予の記憶に対し、一片憐憫の情を動す事ありとせんか、そは素より予にとりて、望外の大幸なり。されど又予を目して、万死の狂徒と做し、当に屍に鞭打つて後已む可しとするも、予に於ては毫も遺憾とする所なし。唯、予が告白せんとする事実の、余りに意想外なるの故を以て、妄に予を誣ふるに、神経病患者の名を藉る事勿れ。予は最近数ヶ月に亘りて、不眠症の為に苦しみつつありと雖も、予が意識は明白にして、且極めて鋭敏なり。若し卿等にして、予が二十年来の相識たるを想起せんか。(予は敢て友人とは称せざる可し)請ふ、予が精神的健

康を疑ふ事勿れ。然らずんば、予が一生の汚辱を披瀝(ひれき)せんとする此遺書の如きも、結局無用の故紙(こし)たると何の選ぶ所か是(これ)あらん。

閣下、並に夫人、予は過去に於て殺人罪を犯したると共に、将来に於ても亦同一罪悪を犯さんとしたる卑(いやし)む可き危険人物なり。しかもその犯罪が卿等に最も親近なる人物に対して、企画せられたるのみならず、又企画せられんとしたりと云ふに至りては、卿等にとりて正に意外中の意外たる可し。予は是(ここ)に於て、予が警告を再(ふたたび)するの、必要なる所以(ゆゑん)を感ぜざる能(あた)はず。予は全然正気(しやうき)にして、予が告白は徹頭徹尾事実なり。

卿等幸（さいはひ）にそを信ぜよ。而（しか）して予が生涯の唯一の記念たる、この数枚の遺書をして、空しく狂人の囈語（げいご）たらしむる事勿れ。

予はこれ以上予の健全を喋々（てふてふ）すべき余裕なし。予が生存すべき僅少なる時間は、直下（ぢきげ）に予を駆りて、予が殺人の動機と実行とを叙し、更に進んで予が殺人後の奇怪なる心境に言及せしめずんば、已まざらんとす。されど、嗚呼（ああ）されど、予は硯（けん）に呵（か）し紙（し）に臨んで、猶（なほ）惶々（くわうくわう）として自ら安からざるものあるを覚ゆ。惟（おも）ふに予が過去を点検し記載するは、予にとりて再（ふたたび）過去の生活を営むと、畢竟（ひつきやう）何の差違かあらん。予は殺人の

計画を再(ふたたび)し、その実行を再し、更に最近一年間の恐る可き苦悶を再せざる可(べか)らず。是果して善く予の堪へ得可き所なりや否や。予は今にして、予が数年来失却したる我(わが)耶蘇基督(ヤソキリスト)に祈る。願くば予に力を与へ給へ。

　予は少時より予が従妹たる今の本多子爵夫人（三人称を以て、呼ぶ事を許せ）往年の甘露寺明子(かんろじあきこ)を愛したり。予の記憶に溯(さかのぼ)りて、予が明子と偕(とも)にしたる幸福なる時間を列記せんか。そは恐らく卿等が卒読(そつどく)の煩(はん)に堪へざる所ならん。されど予はその例証として、今日も猶予が胸底に歴々たる一場の光景を語らざるを得ず。予は当時十六歳の少年にして、明子は未(いまだ)十歳の少女

なりき。五月某日予等は明子が家の芝生なる藤棚の下（もと）に嬉戯（きぎ）せしが、明子は予に対して、隻脚（せききやく）にて善く久しく立つを得るやと問ひぬ。而して予が否と答ふるや、彼女は左手を垂れて左の趾（あしゆび）を握り、右手を挙げて均衡を保ちつつ、隻脚にて立つ事、是を久（ひさ）うしたりき。頭上の紫藤（しとう）は春日の光りを揺りて垂れ、藤下（とうか）の明子は凝然（ぎようぜん）として彫塑（てうそ）の如く佇（たたず）めり。予はこの画の如き数分の彼女を、今に至つて忘るる能はず。私（ひそか）に自ら省みて、予が心既に深く彼女を愛せるに驚きしも、実にその藤棚の下に於て然りしなり。爾来（じらい）予の明子に対する愛は益（ますます）烈しきを加へ、念々（ねんねん）に彼女を想ひて、殆（ほとんど）

学を廃するに至りしも、予の小心なる、遂に一語の予が衷心を吐露す可きものを出さず。陰晴（いんせい）定りなき感情の悲天の下に、或は泣き、或は笑ひて、茫々（ばうばう）数年の年月を閲（けみ）せしが、予の二十一歳に達するや、予が父は突然予に命じて、遠く家業たる医学を英京竜動（ロンドン）に学ばしめぬ。予は訣別に際して、明子に語るに予が愛を以てせんとせしも、厳粛なる予等が家庭は、斯（かか）る機会を与ふるに吝（やぶさか）なりしと共に、儒教主義の教育を受けたる予も、亦桑間濮上（さうかんぼくじやう）の譏（そしり）を惧（おそ）れたるを以て、無限の離愁を抱きつつ、孤笈飄然（こきふへうぜん）として英京に去れり。

英吉利（イギリス）留学の三年間、予がハイド・パアクの芝生に

立ちて、如何に故園（こゑん）の紫藤花下（しとうくわか）なる明子を懐（おも）ひしか、或は又予がパルマルの街頭を歩して、如何に天涯の遊子たる予自身を憫（あはれ）みしか、そは茲（ここ）に叙説するの要なかる可し。予は唯、竜動（ロンドン）に在るの日、予が所謂（いはゆる）薔薇色の未来の中に、来る可き予等の結婚生活を夢想し、以て僅に悶々の情を排せしを語れば足る。然り而して予の英吉利より帰朝するや、予は明子の既に嫁して第×銀行頭取 満村恭平（みつむらきようへい） の妻となりしを知りぬ。予は即座に自殺を決心したれども、予が性来の怯懦（けふだ）と、留学中帰依（きえ）したる基督教（キリストけう）の信仰とは、不幸にして予が手を麻痺（まひ）せしめしを如何（いかん）。卿等にして若し当時の予が、如

何に傷心したるかを知らんとせば、予が帰朝後旬日にして、再(ふたたび)英京に去らんとし、為に予が父の激怒を招きたるの一事を想起せよ。当時の予が心境を以てすれば、実に明子なきの日本は、故国に似て故国にあらず、この故国ならざる故国に止つて、徒(いたづら)に精神的敗残者たるの生涯を送らんよりは、寧(むしろ)チヤイルド・ハロルドの一巻を抱いて、遠く万里の孤客となり、骨を異域の土に埋むるの遙(はるか)に慰む可きものあるを信ぜしなり。されど予が身辺の事情は遂に予をして渡英の計画を抛棄(はうき)せしめ、加之(しかのみならず)予が父の病院内に、一個新帰朝のドクトルとして、多数患者の診療に忙殺さる可き、退

屈なる椅子に倚(よ)らしめ了(をは)りぬ。

　是に於て予は予の失恋の慰藉(ゐしや)を神に求めたり。当時築地に在住したる英吉利宣教師ヘンリイ・タウンゼンド氏は、この間に於ける予の忘れ難き友人にして、予の明子に対する愛が、幾多の悪戦苦闘の後、漸次(ぜんじ)熱烈にしてしかも静平なる肉親的感情に変化したるは、一(いつ)に同氏が予の為に釈義したる聖書の数章の結果なりき。予は屢(しばしば)、同氏と神を論じ、神の愛を論じ、更に人間の愛を論じたるの後、半夜行人(かうじん)稀なる築地居留地を歩して、独り予が家に帰りしを記憶す。若し卿等にして予が児女の情あるを哂(わら)はずんば、予は居留地の空なる

半輪の月を仰ぎて、私に従妹明子の幸福を神に祈り、感極つて歔欷せしを語るも善し。

予が愛の新なる転向を得しは、所謂「あきらめ」の心理を以て、説明す可きものなりや否や、予は之を詳にする勇気と余裕とに乏しけれど、予がこの肉親的愛情によりて、始めて予が心の創痍を医し得たるの一事は疑ふ可らず。是を以て帰朝以来、明子夫妻の消息を耳にするを蛇蝎の如く恐れたる予は、今や予がこの肉親的愛情に依頼し、進んで彼等に接近せん事を希望したり。こは予にして若し彼等に幸福なる夫妻を見出さんか、予の慰安の益大にして、念頭些の苦

悶なきに至る可しと、早計にも信じたるが故のみ。

予はこの信念に動かされし結果、遂に明治十一年八月三日両国橋畔の大煙火に際し、知人の紹介を機会として、折から校書十数輩と共に柳橋万八の水楼に在りし、明子の夫満村恭平と、始めて一夕の歓を倶にしたり。歓か、歓か、予はその苦と云ふの、遥に勝れる所以を思はざる能はず。予は日記に書して曰、「予は明子にして、かの満村某の如き、濫淫の賤貨に妻たるを思へば、殆一肚皮の憤怨何の処に向つてか吐かんとするを知らず。神は予に明子を見る事、妹の如くなる可きを教へ給へり。然り而して予が妹を、斯る禽獣

の手に委（ゐ）せしめ給ひしは、何ぞや。予は最早、この残酷にして奸譎（かんけつ）なる神の悪戯に堪ふる能はず。誰か善くその妻と妹とを強人（がうじん）の為に凌辱（りようじよく）せられ、しかも猶天を仰いで神の御名（みな）を称（とな）ふ可きものあらむ。予は今後断じて神に依らず、予自身の手を以て、予が妹明子をこの色鬼（しきき）の手より救助す可し。」

予はこの遺書を認（したた）むるに臨み、再（ふたたび）当時の呪（のろ）ふ可き光景の、眼前に彷彿（はうふつ）するを禁ずる能はず。かの蒼然（さうぜん）たる水靄（すゐあい）と、かの万点の紅燈と、而してかの隊々（たいたい）相銜（ふく）んで、尽くる所を知らざる画舫（ぐわばう）の列と——嗚呼（ああ）、予は終生その夜、その半空（はんくう）に仰ぎたる煙火の明滅を記憶す

ると共に、右に大妓（たいぎ）を擁し、左に雛妓（すうぎ）を従へ、猥褻（わいせつ）聞くに堪へざるの俚歌を高吟しつつ、傲然（がうぜん）として涼棚（りやうはう）の上に酣酔（かんすゐ）したる、かの肥大豕（ゐ）の如き満村恭平をも記憶す可し。否、否、彼の黒絽（くろろ）の羽織に抱明姜（だきめうが）の三つ紋ありしさへ、今に至つて予は忘却する能はざるなり。予は信ず。予が彼を殺害せんとするの意志を抱きしは、実にこの水楼煙火（すゐろうえんくわ）を見しの夕（ゆふべ）に始る事を。又信ず。予が殺人の動機なるものは、その発生の当初より、断じて単なる嫉妬の情にあらずして、寧（むしろ）不義を懲（こら）し不正を除かんとする道徳的憤激に存せし事を。

爾来予は心を潜めて、満村恭平の行状に注目し、そ

の果して予が一夕の観察に悖(もと)らざる痴漢なりや否やを検査したり。幸(さいはひ)にして予が知人中、新聞記者を業とするもの、啻(ただ)に二三子に止らざりしを以て、彼が淫虐無道の行跡の如きも、その予が視聴に入らざるものは絶無なりしと云ふも妨げざる可し。予が先輩にして且知人たる成島柳北(なるしまりうほく)先生より、彼が西京祇園(さいきやうぎをん)の妓楼に、雛妓(すうぎ)の未(いまだ)春を懐(いだ)かざるものを梳櫳(そろう)して、以て死に到らしめしを仄聞(そくぶん)せしも、実に此間の事に属す。しかもこの無頼(ぶらい)の夫にして、夙(つと)に温良貞淑の称ある夫人明子を遇するや、奴婢(どひ)と一般なりと云ふに至つては、誰か善く彼を目して、人間の疫癘(えきれい)と做(な)さざるを得んや。既

に彼を存するの風を頽(おと)し俗を濫(みだ)る所以(ゆゑん)なるを知り、彼を除くの老を扶(たす)け幼を憐む所以なるを知る。是に於て予が殺害の意志たりしものは、徐(おもむろ)に殺害の計画と変化し来れり。

　然れども若し是に止らんか、予は恐らく予が殺人の計画を実行するに、猶(なほ)幾多の逡巡なきを得ざりしならん。幸か、抑亦(そもまた)不幸か、運命はこの危険なる時期に際して、予を予が年少の友たる本多子爵と、一夜墨上(ぼくじやう)の旗亭柏屋(かしはや)に会せしめ、以て酒間その口より一場の哀話を語らしめたり。予はこの時に至つて、始めて本多子爵と明子とが、既に許嫁(いひなづけ)の約ありしにも関らず、彼(かの)、

満村恭平が黄金の威に圧せられて、遂に破約の已(や)む無きに至りしを知りぬ。予が心、豈(あに)憤(いきどほり)を加へざらんや。かの酒燈一穂(しゅとういっすゐ)、画楼簾裡(ぐわろうれんり)に黯淡(あんたん)たるの処、本多子爵と予とが杯(はい)を含んで、満村を痛罵せし当時を思へば、予は今に至つて自(おのづか)ら肉動くの感なきを得ず。されど同時に又、当夜人力車に乗じて、柏屋より帰るの途、本多子爵と明子との旧契を思ひて、一種名状す可らざる悲哀を感ぜしも、予は猶明(あきらか)に記憶する所なり。請ふ。再び予が日記を引用するを許せ。「予は今夕本多子爵と会してより、愈(いよいよ)旬日の間に満村恭平を殺害す可しと決心したり。子爵の口吻より察するに、彼と明子と

は、独り許嫁の約ありしのみならず、又実に相愛の情を抱きたるものの如し。（予は今日にして、子爵の独身生活の理由を発見し得たるを覚ゆ）若し予にして満村を殺害せんか、子爵と明子とが伉儷（かうれい）を完（まつた）うせんは、必しも難事にあらず。偶（たまたま）明子の満村に嫁して、未（いま）だ一児を挙げざるは、恰（あたか）も天意亦予が計画を扶（たす）くるに似たるの観あり。予はかの獣心の巨紳を殺害するの結果、予の親愛なる子爵と明子とが、早晩幸福なる生活に入らんとするを思ひ、自（おのづか）ら口辺の微笑を禁ずる事能はず。」

今や予が殺人の計画は、一転して殺人の実行に移ら

んとす。予は幾度か周密なる思慮に思慮を重ねたるの後、漸(やうや)くにして満村を殺害す可き適当なる場所と手段とを選定したり。その何処(いづこ)にして何なりしかは、敢て詳細なる叙述を試みるの要なかる可し。卿等にして猶明治十二年六月十二日、独逸(ドイツ)皇孫殿下が新富座に於て日本劇を見給ひしの夜、彼、満村恭平が同戯場(ぎぢやう)よりその自邸に帰らんとするの途次、馬車中に於て突如病死したる事実を記憶せんか、予は新富座に於て満村の血色宜(よろ)しからざる由を説き、これに所持の丸薬の服用を勧誘したる、一個壮年のドクトルありしを語れば足る。嗚呼、卿等請ふ、そのドクトルの面(おもて)を想像せよ。

彼は纍々（るゐるゐ）たる紅球燈の光を浴びて、新富座の木戸口に佇（たたず）みつつ、霖雨の中に奔馳（ほんち）し去る満村の馬車を目送するや、昨日の憤怨、今日の歓喜、均（ひと）しく胸中に蝟集（ゐしふ）し来り、笑声嗚咽（をえつ）共に唇頭（しんとう）に溢れんとして、殆（ほとんど）処の何処（いづこ）たる、時の何時（なんどき）たるを忘却したりき。しかもその彼が且泣き且笑ひつつ、蕭雨（せうう）を犯し泥濘（でいねい）を踏んで、狂せる如く帰途に就きしの時、彼の呟（つぶや）いて止めざりしものは明子の名なりしをも忘るる事勿れ。――「予は終夜眠らずして、予が書斎を徘徊（はいくわい）したり。歓喜か、悲哀か、予はそを明にする能はず。唯、或云ひ難き強烈なる感情は、予の全身を支配して、一霎時（いつせふじ）たりと雖（いへど）も、

予をして安坐せざらしむるを如何（いかん）。予が卓上には三鞭酒（シャンペンしゅ）あり。薔薇の花あり。而して又かの丸薬の箱あり。予は殆（ほとんど）、天使と悪魔とを左右にして、奇怪なる饗宴を開きしが如くなりき……。」

予は爾来（じらい）数ケ月の如く、幸福なる日子（につし）を閲（けみ）せし事あらず。満村の死因は警察医によりて、予の予想と寸分の相違もなく、脳出血の病名を与へられ、即刻地下六尺の暗黒に、腐肉を虫蛆（ちうそ）の食としたるが如し。既に然り、誰か又予を目して、殺人犯の嫌疑ありと做（な）すものあらん。しかも仄聞（そくぶん）する所によれば、明子はその良人の死に依りて、始めて蘇色ありと云ふにあらずや。予

は満面の喜色を以て予の患者を診察し、閑（ひま）あれば即（すなはち）本多子爵と共に、好んで劇を新富座に見たり。是全く予にとりては、予が最後の勝利を博せし、光栄ある戦場として、屢（しばしば）その花瓦斯（はなガス）とその掛毛氈（かけまうせん）とを眺めんとする、不思議なる欲望を感ぜしが為のみ。

　然れどもこは真に、数ヶ月の間なりき。この幸福なる数ヶ月の経過すると共に、予は漸次予が生涯中最も憎む可き誘惑と闘ふ可き運命に接近しぬ。その闘（たたかひ）の如何に酷烈を極めたるか、如何に歩々（ほほ）予を死地に駆逐したるか。予は到底茲（ここ）に叙説するの勇気なし。否、この遺書を認（したた）めつつある現在さへも、予は猶この水蛇（ハイドラ）

の如き誘惑と、死を以て闘はざる可らず。卿等にして若し、予が煩悶の跡を見んと欲せば、請ふ、以下に抄録せんとする予が日記を一瞥（いちべつ）せよ。

「十月×日、明子、子なきの故を以て満村家を去る由、予は近日本多子爵と共に、六年ぶりにて彼女と会見す可し。帰朝以来、始（はじめ）予は彼女を見るの己（おのれ）の為に忍びず、後は彼女を見るの彼女の為に忍びずして、遂に荏苒（じんぜん）今日に及べり。明子の明眸（めいぼう）、猶六年以前の如くなる可きや否や。

「十月×日、予は今日本多子爵を訪れ、始めて共に明子の家に赴（おもむ）かんとしぬ。然るに豈計（あにはか）らんや、子爵は

予に先立ちて、既に彼女を見る事両三度なりと云はんには。子爵の予を疎外する、何ぞ斯くの如く甚しきや。予は甚しく不快を感じたるを以て、辞を患者の診察に託し、匆惶として子爵の家を辞したり。子爵は恐らく予の去りし後、単身明子を訪れしならんか。

「十一月×日、予は本多子爵と共に、明子を訪ひぬ。明子は容色の幾分を減却したれども、猶紫藤花下に立ちし当年の少女を髣髴するは、未必しも難事にあらず。嗚呼予は既に明子を見たり。而して予が胸中、反つて止む可らざる悲哀を感ずるは何ぞ。予はその理由を知らざるに苦む。

「十二月×日、子爵は明子と結婚する意志あるものの如し。斯くして予が明子の夫を殺害したる目的は、始めて完成の域に達するを得ん。されど――されど、予は予が再(ふたたび)明子を失ひつつあるが如き、異様なる苦痛を免るる事能はず。

「三月×日、子爵と明子との結婚式は、今年年末を期して、挙行せらるべしと云ふ。予はその一日も速(すみやか)ならん事を祈る。現状に於ては、予は永久にこの止み難き苦痛を脱離する能はざる可し。

「六月十二日、予は独り新富座に赴(おもむ)けり。去年今月今日、予が手に仆(たふ)れたる犠牲を思へば、予は観劇中も

自ら会心の微笑を禁ぜざりき。されど同座より帰途、予がふと予の殺人の動機に想到するや、予は殆帰趣を失ひたるかの感に打たれたり。嗚呼、予は誰の為に満村恭平を殺せしか。本多子爵の為か、明子の為か、抑も亦予自身の為か。こは予も亦答ふる能はざるを如何。

「七月×日、予は子爵と明子と共に、今夕馬車を駆つて、隅田川の流燈会を見物せり。馬車の窓より洩るる燈光に、明子の明眸の更に美しかりしは、殆予をして傍に子爵あるを忘れしめぬ。されどそは予が語らんとする所にあらず。予は馬車中子爵の胃痛を訴ふる

や、手にポケツトを捜（さぐ）りて、丸薬の函（はこ）を得たり。而してその「かの丸薬」なるに一驚したり。予は何が故に今宵この丸薬を携へたるか。偶然か、予は切にその偶然ならん事を庶幾（こひねが）ふ。されどそは必しも偶然にはあらざりしものの如し。

「八月×日、予は子爵と明子と共に、予が家に晩餐を共にしたり。しかも予は終始、予がポケツトの底なるかの丸薬を忘るる事能はず。予の心は、殆予自身にとりても、不可解なる怪物を蔵するに似たり。

「十一月×日、子爵は遂に明子と結婚式を挙げたり。予は予自身に対して、名状し難き憤怒（ふんぬ）を感ぜざるを得

ず。その憤怒たるや、恰(あたか)も一度遁走(とんそう)せし兵士が、自己の怯懦(けふだ)に対して感ずる羞恥(しうち)の情に似たるが如し。

「十二月×日、予は子爵の請(こひ)に応じて、之をその病床に見たり、明子亦傍にありて、夜来発熱甚しと云ふ。予は診察の後、その感冒に過ぎざるを云ひて、直(ただち)に家に帰り、子爵の為に自ら調剤しぬ。その間約二時間、「かの丸薬」の函は終始予に恐る可き誘惑を持続したり。

「十二月×日、予は昨夜子爵を殺害せる悪夢に脅(おびやか)されたり。終日胸中の不快を排し難し。

「二月×日、嗚呼予は今にして始めて知る、予が子爵を殺害せざらんが為には、予自身を殺害せざる可らざ

るを。されど明子は如何。」

子爵閣下、並に夫人、こは予が日記の大略なり。大略なりと雖も、予が連日連夜の苦悶は、卿等必ずや善く了解せん。予は本多子爵を殺さざらんが為には、予自身を殺さざる可らず。されど予にして若し予自身を救はんが為に、本多子爵を殺さんか、予は予が満村恭平を屠りし理由を如何の地にか求む可けん。若し又彼を毒殺したる理由にして、予の自覚せざる利己主義に伏在したるものと做さんか、予の人格、予の良心、予の道徳、予の主張は、すべて地を払って消滅す可し。是素より予の善く忍び得る所にあらず。予は寧、予

自身を殺すの、遙に予が精神的破産に勝(まさ)れるを信ずるものなり。故に予は予が人格を樹立せんが為に、今宵「かの丸薬」の函によりて、嘗(かつ)て予が手に僵(たふ)れたる犠牲と、同一運命を担はんとす。

本多子爵閣下、並に夫人、予は如上(じよじやう)の理由の下に、卿等がこの遺書を手にするの時、既に死体となりて、予が寝台に横はらん。唯、死に際して、縷々(るる)予が呪ふ可き半生の秘密を告白したるは、亦以て卿等の為に聊(いささか)自(みづか)ら潔(いさぎよく)せんと欲するが為のみ。卿等にして若し憎む可くんば、即ち憎み、憐む可くんば、即ち憐め。予は――自ら憎み、自ら憐める予は、悦んで卿等の憎

悪と憐憫とを蒙る可し。さらば予は筆を擱(お)いて、予が馬車を命じ、直(ただち)に新富座に赴かん。而して半日の観劇を終りたるの後、予は「かの丸薬」の幾粒を口に啣(ふく)みて、再(ふたたび)予が馬車に投ぜん。節物(せつぶつ)は素(もと)より異れども、紛々たる細雨は、予をして幸に黄梅雨(くわうばいう)の天を彷彿せしむ。斯くして予はかの肥大豕(ゐ)に似たる満村恭平の如く、車窓の外に往来する燈火の光を見、車蓋(しやがい)の上に蕭々(せうせう)たるる夜雨の音を聞きつつ、新富座を去る事甚(はなはだ)遠からずして、必(かならず)予が最期の息を呼吸す可し。卿等亦明日の新聞を繙すの時、恐らくは予が遺書を得るに先立つて、ドクトル北畠義一郎が脳出血病を以て、観劇の帰途、

馬車内に頓死せしの一項を読まんか。終に臨んで予は切に卿等が幸福と健在とを祈る。卿等に常に忠実なる僕（しもべ）、北畠義一郎拝。

（大正七年六月）

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：野口英司
1998年7月6日公開
2004年2月23日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。